

# 名事研=ユス

一面  
名古屋市長特別支援学校事務職員研究大会  
二面  
ランドデザイン報告・学校マネジメントフォーラム及び  
京都市立学校事務研究大会参加レポート

## 学校事務の高度化を目指して 第二十回の研究大会開催される

平成二十七年一月二十一日に第二十回名古屋市立小中特別支援学校事務職員研究大会が開催されました。当日は北区、南区の区学校事務研究会の報告から始まり、平成二十三年度に策定した「名古屋の学校事務のランドデザイン」の年次テーマ「学校事務の高度化（評価システムの構築）」のもと、研究発表では『つくろう！改善していく評価システム』による学校間連携の評価システムの構築について提案しました。意見交換では、会場の皆さんから多くの意見がでるなど、活発な大会となりました。今号では名古屋の学校事務のランドデザインについて、名事研組織として取り組んだ内容の状況報告、更に学校マネジメントフォーラム、京都市立学校事務研究大会の参加報告を掲載します。

### 研究発表

『つくろう！改善していく評価システム』  
学校事務の高度化を目指して

発表者 名事研 発表部  
助言者 松本 信幸氏（静岡市学校事務支援室 室長）

平成二十三年度に策定されたランドデザインのもと、今年度は、評価を生かし、改善する仕組みづくりを通して学校事務の質的向上を図っていくために、「評価システムの構築」についての研究を行いました。



その研究の取り組みとして、現状の学校間連携が、理想の組織として機能しているかどうかのアンケートを実施しました。

平成二十四年度に研究部が考えた学校間連携における役割と具体的な行動の項目について、自分自身が、または、連携ブロックとして役割ができていくかという事と、学校間連携において工夫している点や、改善のアイデアについてのアンケートも行いました。

アンケート結果をみると、ほとんどの項目において、役割と具体的な行動を自分自身でできている事がわかりました。その反面、できている回答が少ない項目として「事務長の補佐」等が挙げられましたが、連携ブロックとしての回答結果では、全ての職名において、できていると思う割合が高い結果でした。

主査が「事務長を補佐できなかった」と感じていても、事務長は「十分に補佐してもらっている」と感じている場合が多く、職名によって、認識のズレがあるよ

うに思われます。また、「反省点を次年度に活かしていきたい」などの記述があり、学校間連携では、評価という形式がないうち、一年間の振り返りを次年度に活かしていきたいことから、PDCAサイクルを確立し、新しい評価システムの構築が必要であると考えました。そして、名古屋に適した評価システムの参考とするために、実施している学校間連携が名古屋市の内容と近い都市や、評価の観点や視点が細かく定められている都市についての調査を行いました。

調査結果から、実施内容の評価し、改善点を洗い出して今後につなげていく事を各都市で実施しており、評価を行う事によって、それぞれの業務の改善につなげている事がわかりました。続いてアンケート結果と他都市の調査を踏まえ、名古屋に適した評価システムの構築につ

ての提案を行いました。まず現在の名古屋の学校間連携の課題として、学校間連携の構成人員の入れ替わりによって取り組みが継続していないことや、年度始め・年度末に十分な計画や振り返りが行えていないといった点を挙げました。

これらの課題から、評価システムの構築に必要なことは、「学校事務の標準化・効率化を推進すること」「学校間連携を学校全体で取り組むこと」「取り組み内容に継続性を持たせること」「PDCAサイクルを確立して年度始めの計画、年度末の振り返りを十分に引き、課題などに対する気づきをもたらし改善していくこと」としました。これらを踏まえて提案したのは学校間連携推進シートと呼ばれるもので、従来の学校間連携実施計画書と学校間連携実施報告書をひとつの様式にまとめたものです。実際に学校間連携推進シートをスライドに映し、各評価項目やそれに対する具体的な評価観点について説明をしました。

発表の終わりでは、平成二十六年七月二十九日の中央教育審議会の諮問に触れ、学校組織全体の総合力を一層高めていくための方策をどのように考えるかという事に触れました。学校事務職員の役割・関わり方が期待されているということ、また標準職務について学校間連携のスキルメリットを活かしていくことが必要であると述べ、最後には、子どもたちのより一層の教育活動の充実に寄与していきましょう、とまとめました。

発表の終わりでは、平成二十六年七月二十九日の中央教育審議会の諮問に触れ、学校組織全体の総合力を一層高めていくための方策をどのように考えるかという事に触れました。学校事務職員の役割・関わり方が期待されているということ、また標準職務について学校間連携のスキルメリットを活かしていくことが必要であると述べ、最後には、子どもたちのより一層の教育活動の充実に寄与していきましょう、とまとめました。



### 松本氏からの助言

静岡の共同実施における評価システムについてお話いただき、名古屋の学校間連携を取り巻く現状についてご助言いただきました。意見交換では、「学校間連携推進シートを使用すると、今以上に負担が増えるのではないか」という懸念の声もあがり、松本氏は「反省・見つけ直しを行う」ということは本来に必要なこととされ、「最初は確かに大変だと思う。私は今回の提案はひとつの出発点だと理解した。当事者である皆さんが実際に使用し、意見を出し合い、全員で改善していくってほしい」と述べられました。

「学校間連携推進シートを使用すると、今以上に負担が増えるのではないか」という懸念の声もあがり、松本氏は「反省・見つけ直しを行う」ということは本来に必要なこととされ、「最初は確かに大変だと思う。私は今回の提案はひとつの出発点だと理解した。当事者である皆さんが実際に使用し、意見を出し合い、全員で改善していくってほしい」と述べられました。

## 区研究報告

### （北区研究報告）

北区学校事務研究会は小学校十八校、中学校七校の学校事務職員二十六名で構成されています。新規採用者からベテランまで、さまざまな経験年数の会員が集まっています。今年度は新しい取り組みとして、共通テーマとそれに沿った分野を設定し、それぞれのグループが研究を進めていく形をとりました。平成二十九年に予定されている県費負担教職員の政令指定都市への移管を見据え「県費負担教職員と市費職員の違い」を共通テーマとし、服務・給与・共済の分野に分かれてグループが研究を行いました。また、違いだけでなく、移管についてのこれまでの制度や経緯・今後の流れを調べるグループを設けました。会の最後には各グループの進捗状況や情報の交換を行いました。分野別に研究をしていく中で県費職員と市費職員の制度的な違いを確認することができ、一方で意外なところでも共通点があることにも気づきました。現在、市費職員に関して直面する事例は少なく、改めて調べてみることで、理解を深めることができました。

今後政令指定都市への移管が本格実施されると、取り扱う事務も少なからず変化することが予想されます。新制度に対応していく上で今回の研究が役立てられたらと考えています。



### （南区研究報告）

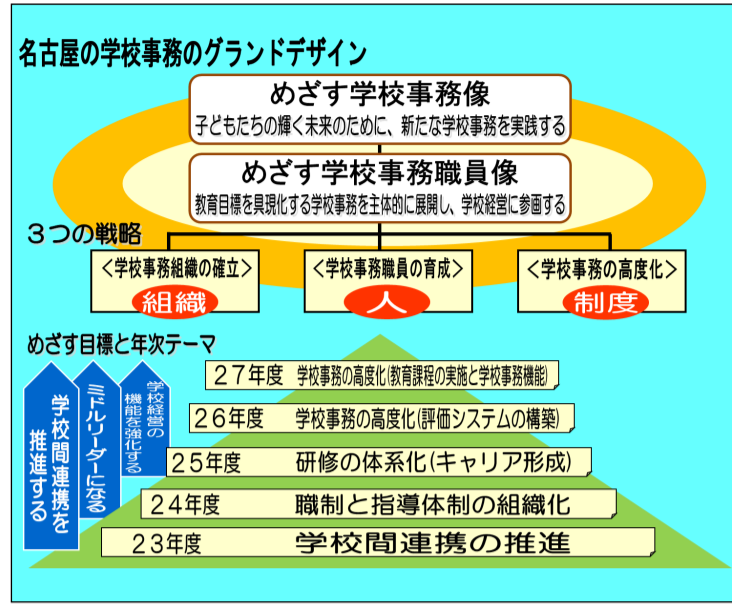
今年度南区は情報交換、グループ研究を行いました。情報交換では「知ってる？教えて！」と題して、日々の業務に疑問に思うことなどを発表し、意見を交換をしました。経験年数の浅い会員が多く在籍するため、意見を交換することとで会員それぞれのスキルアップにつながりました。

グループ研究では、「教職員向け資料作成」、「事務改善」、「文書整理」の3グループに分かれて取り組みました。「教職員向け資料作成」では、見やすく、分かりやすく、事務処理をスムーズに行ってもらうための資料作成の活動として、旅行命令書の記載例作りに取り組みました。製作の過程での検討や、関係各所に問い合わせで確認を重ねたことで、正しい知識を得ることができ、意義を感じ取り組みました。「事務改善」では、学校事務職員だけではなく、他の教職員や児童生徒などを含む学校全体にとって良い状態を目指す改善として講師の任用の改善事例についてを、「文書整理」では、「南区版・学校事務重要通知文集」の作成に取り組みました。



# 新しい名古屋の学校事務をみんなの力で～グランドデザインの取り組み～

名事研は、平成二十三年度に「学校づくり」に積極的に関わり、名古屋の学校事務をより効果のあるものにしていく」ために、「名古屋GD」を策定し、今年度が四年目となります。「名古屋GD」は目標に向けた行動に継続性を持たせ、「みんな」で「方向性をあわせる」ための実行策として、年度ごとの「年次テーマ」を設定しています。平成二十六年度は年次テーマ「学校事務の高度化（評価システムの構築）」のもと、具体的な行動を掲げた行動計画を定め、事業に取り組んできました。



事務局は、「名古屋GD」を推進していくために、専門部の行動計画について進捗管理を行うとともに、平成二十七年年度の行動計画の作成に取り組みました。「名古屋GD」の理念や行動計画の内容について、会員への働きかけを行なううえで、会員への意見集約を行い、計画の見直しなどを行いました。

研究部は、昨年度行ってきた学校組織の中での職別の役割や、その役割を果たすために必要な能力について考察した研究内容を踏まえて、今年度は、学校事務の高度化への手立てとしての「評価システムの構築」について研究を進めました。また、市研究大会では情報部とともに発表部の中心となり、研究発表を行いました。

研修部は、行動計画の具体的な行動にある「経験別

の研修の充実をはかる」を受けて、全体研修、経験年数一〜三年対象の経験別研修、7、8年目相当の会員を対象としたステップアップ研修を企画・運営しました。他に、自主研修資料「S o i a」の内容について新規作成や更新を行い、研修機会の充実を図りました。情報部は、広報活動を中心に活動しました。名事研メールの配信、名事研ニュースや会員向けの広報誌「じむけん!」の発行を行いました。また、年末調整の記載例などの会員向けの資料提供や会員の情報調査を行い、学校事務の平準化への一助となるように活動しました。世話係会では、最近の学校事務職員を取り巻く情勢について話し合いを行いました。また、各区の事務研究会の年度替わりにかかる引継ぎ体制について調査し、情報の共有を図ることができました。今年度は学校間連携の現状を把握するための調査を情報部が行い、その結果や昨年度研究部が進めてきた「名古屋の学校間連携のスタンダード」を作るための研究などを基に、学校間連携に適した「評価システムの構築」の研究を行いました。また、研修の体系化についても研究部の研究成果を反映させることで、昨年度の課題であった各組織の連携を推し進めることができた一年であったと思います。ただ、研究大会で提案した学校間連携推進シートについて、実際に活用していくシステムの構築方法や評価観点について、今後も研究していく必要があるとともに、昨年度から引き続き多くの解決しなければならない課題も整理していく必要があります。平成二十七年年度の年次テーマは「学校事務の高度化（教育課程の実施と学校事務機能）」です。今年度提案した評価システムの構築についてを踏まえ、次年度はその改善していく仕組みづくりの研究をさらに進めていくとともに、学校事務職員が教育課程へどう関わっていくのか、また学校事務機能について研究していきます。

来年度は平成二十三年度から始まった名古屋GDの最終年度であります。「学校事務の高度化」を目指し、教育課程への関わりと学校事務機能について考えていくとともに、五年間の積み重ねたものを次世代にどのように引き継いでいくのかについても、会員の皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

平成二十六年度学校マネジメントフォーラムが平成二十六年十月三十一日に文部科学省講堂で開催されました。また、京都市立学校事務研究大会が平成二十六年十二月十二日に京都市総合教育センターで開催され、名事研からも複数の方が参加しました。

皆様への今後の研究活動の一助としてフォーラムや研究大会で得た情報を還元するため、今回参加した方に、内容や感想について取材しましたので、報告します。

## 平成二十六年度 学校マネジメントフォーラム 参加レポート

講演内容が「事務機能の強化による学校の組織力の向上」ということでしたが、講演を聞いてどのように感じましたか。

学校マネジメントとは、教員や事務職員が個別に何かするものではないことがよく分かりました。子どもたちが安心して生活できる環境を作っていくという共通の目的のもと、校内の教職員はもちろんのこと地域・保護者や近隣学校との縦横のつながりを築き、教職員同士のネットワークが綿密に張られていて互いをサポートし合う、それが「チーム学校」なのだと感じました。参加者に管理職の方がみられたのも印象的でした。

・特に印象に残っている実践発表は何でしたか。

宇都宮市の「地域学校園事務室」では、配当予算の枠を小中学校間で共有できるような弾力性をもたせていました。また物品リストを作って教材教具等の自由な貸し借りも行って、財務面での強いつながりが感じられました。小中一貫の縦のつながりは保護者にとっても、義務教育九年間にかかる必要経費等の情報が得られ生活設計を立てやすいという利点があります。学校同士がつながり、そして教育委員会と地域・学校との距離感も縮めることで、大きな一つのチームになっていくように感じました。

## 平成二十六年度 京都市学校事務研究大会 参加レポート

提案内容が「次代の学校事務を切り拓くのは、私たち学校事務職員」ということでしたが、基調提案を聞いてどのように感じましたか。

京都市では、平成十六年度に「学校財務事務取扱要綱」が制定され、学校財務運営においては学校事務職員が中心となって行うことが規定されています。確立された財務事務担当者としての立場だけではなく、学校事務全般の機能強化や、学校と地域の連携の推進といった、現在学校が直面している課題においても、学校事務職員としての存在意義を明確にしていこうという発言に、学校事務職員一人一人のモチベーションの高さを感じました。

・特に印象に残っている活動報告は何でしたか。

予算の余剰分を次年度に執行することが可能である「学校予算キャリアー制度」を利用した実践報告がとても印象的でした。

大会後、制度について詳しく調べたところ、一会計年度の原則は外すことができないため、予算を繰越すのではなく、40万円を限度として次年度に加算を受けることができる制度であることが分かりました。名古屋にはない制度について触れることができ、自分の中にある発想の幅を広げることができました。

### 編集後記

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

今回の名事研ニュースは、市大会を中心とした内容となりました。名古屋GDも四年目が経過しようとしています。今後も皆様と名古屋GDの活動を進めていく上で、名事研活動に興味を持っていただけるような紙面作りにもこれからは取り組んでいきたいと思えます。

今後とも名事研活動にご協力下さい。